

心から笑顔を取り戻せる しなやかな町としてよみがえるために

厚真町長 宮坂尚市朗



——災害対応の初動について伺います。

突き上げられるような揺れで「役場が倒壊しているのではないか」そんな心配をしながら家を出ました。午前3時半過ぎに厚真町役場にたどり着きましたが、庁舎はしっかり建っていましたし、自家発電機が稼働して明かりも点いていましたので、少しだけほっとしました。

まずは状況を把握しようと職員が地区巡回を行うとともに、避難所の開設を指示しました。道路の寸断や家屋の倒壊などの報告が入り、深刻な状況であるとわかり始めました。消防署には「下敷きになっているから助けてくれ」「家族が命の危険にさらされている」という出動要請が入っていたので、一刻も早く救出するために消防や自衛隊など関係機関と連絡を取り、夜明けと同時に人命救助ができるよう準備を即座に開始しました。

夜明けとともにテレビには上空から撮った映像が流れ始め、想像以上の甚大な被害であることがわかりました。自衛隊の災害派遣の要請権限は知事がありますが、早急に対応するため、自衛隊幹部の方々と直接情報交換しながら対応策を考えました。

自衛隊の捜索が始まったのは午前9時くらいだったと思います。情報が交錯している中で、どの地区にはどの部隊を投入するか、そのためのルートをどう確保するかを災害対策本部で関係機関と協議をしていた状況です。

——行方不明者の捜索は9月10日未明まで続きましたね。

発災当日は午前6時くらいからヘリコプターで救助された方が徐々に避難所へ到着し、その方々の感想からも凄惨な状況が伝わってきました。町職員は人命救助のために全住民の安否確認に当たらせました。被災した方は誰で、どこで、どのような状況にいるのかを把握して地図に落とし、捜索機関と共有しました。

また、避難された方々の命を守るため、水道も電気も通っていない状況の中、とにかく医療機関が稼働できる状態にするよう指示を出しました。まもなく必要な捜索機関、医療スタッフ、DMAT（災害派遣医療チーム）を含むたくさん部隊には、我々が想像していたより早く駆けつけていただきました。

最終的に捜索活動は4日間になりましたが、誰も二次災害に巻き込まれず、行方不明者全員を見つけ出すことができました。その4日間は、胆振東部地震の中でも非常に大きな意味を持つものだったのではないかと思います。

町では生命・財産を守るため、洪水や津波などの大災害に備えて訓練を重ねてきました。町の防災アドバイザーで東北大学災害科学国際研究所助教の定池祐季さんは、平成25（2013）年に兵庫県にある「人と防災未来センター」のご協力のもとに実施した職員向けの図上訓練が縁で、町内の学校での防災授業等を実施していただきました。平成26（2014）年度からは、防災アドバイザーとして防災教育や地域防災リーダー対象の研修など、本町の防

災の取り組み全般に力をお借りしています。今回の震災は想像を絶するものでしたが、これまでの訓練のおかげもあり、ある程度の確な初動対応ができたと思います。町職員約100名という少ない人数でしたが、事前の研修や訓練が生きたのだと思います。

——行方不明者の捜索では地域の方々が大きく貢献されましたね。

今回の震災では、近所の住民同士で救助や安否確認、避難を行った方も多くいます。あれだけ大きな被害が出た中、4日間で捜索活動を終えられたのは、地域の方々から「この家には誰と誰がいて、1階に寝ている人は誰、2階に寝ている人は誰」といった的確な情報をいただきながら捜索活動ができたからです。日頃からのコミュニティ活動、地域内の人間関係の濃さがこの成果を生んだのだと思います。

自治会活動イコール自分たちの命を守ることなんだ。自治会に加入することは意義のあることなんだと実感できたのではないのでしょうか。この経験をふまえて今まさに、さらに高いレベルの防災意識社会に向け、地

区ごとの防災計画を練り上げているところです。

——避難所についてはいかがでしょうか？

すべての避難所を開けることにしましたが、職員からの被害状況の報告を聞くにつれ、避難所での生活が長期化すると判断し、大型施設の避難所へ集約しました。9



被災状況などについて記者会見を行う宮坂町長（中央）

月7日には人口のおよそ4分の1に当たる1,110人を超える方が避難されていますが、避難所で大きな混乱はなかったと思います。

本部長は災害対策本部から移動しないのが鉄則だと聞いていましたが、発災から2日目の朝におもな避難所を回りました。「今ここにて不便かもしれないけれど、現場には人命救助を待っている方がたくさんいる。命がかかっている状況の方がたくさんいるので、落ち着いて行動してください」と状況を大まかに説明して回りました。これを聞いた方がそれぞれ避難してきた方々に伝え、自分たちもしばらく我慢しようということになったのだらうと思います。

——いち早く発災翌日に災害ボランティアセンターが立ち上がりましたね。

同年7月の西日本豪雨で大きな被害を受けた岡山県倉敷市の災害ボランティアセンターに、3名の職員を8月に派遣していました。職員から「想像以上に大変でしたが、様々な面でボランティアが必要で、マッチングしていくセンターが機能しない

と災害復旧が進まない」と復命を受けたのです。まったくの偶然で、地震の数週間前の話です。

こうしたことが頭にありましたから、被災してすぐに、社会福祉協議会に災害ボランティアセンターの立ち上げをお願いしました。そして「ボランティアはどんどん駆けつけてくる。駆けつけてくる方々はプロなので、学びながらやってください」と言いました。

そうこうするうちに北海道社会福祉協議会も含め各地の社会福祉協議会が駆けつけてくださり、手助けを受けながら体制を整えていきました。のちの感想として「ボランティアの皆さんのほうがプロだった。たくさんの方が本当に親身になって活動してくださった」という話を聞きましたね。

——町も東北各県の対口支援をはじめ、多くの支援を受けられましたね。

対口支援に来ていただいた方には驚きました。東北は震災復興の途上なのに、わざわざ職員を引き連れて来てくれたことに非常に感銘を受けましたし、実際の体験者ですから避難所の運営について足りないところ

た喜びが身体からにじみ出るような、そんな町民の様子を見て、ここから厚真町は前向きに変わる、大きなターニングポイントを両陛下にいただいたと思えました。

——これからの厚真町について抱負をお聞かせください。

今回の震災では、3万人以上の方々が厚真町に駆けつけてくださいました。さらに全道、全国から支援物資やメッセージ、金銭的な支援もあり、本当に大勢の方々に応援していただきました。そうした方々との関係をもっと中身の濃いものにしていきたいと考えています。

応援してくださった方々の手を借り、そして被災者と共に心から笑顔を取り戻せるような新しい厚真町。北海道の食料生産基地として、また、都市部の皆さんにこの大自然を共有していただけるような厚真町。そんな懐の深い、しなやかな町としてよみがえるためにも、色々な関係者の力をお借りしたい。その関係者とのご縁を大事にしていきたいと考えています。

ろ、これから想定されるリスク、こういったものも的確に指導してくださり、応急期から復旧期に移行する手助けをしていただきました。

また、国土交通省のTEC-IFORCE（緊急災害対策派遣隊）の皆さんには、災害復旧事業の査定業務で助けられました。災害復旧のために短期間に被害額をまとめて申請する業務があるのですが、町職員の土木担当者が4名しかいないため、これは手に負えないだろうと思っていたところでTEC-IFORCEの皆さんが事前調査をしてくださり、調査結果をほとんど完成品に近い形で提供していただきました。これで復旧作業についてイメージができるようになりましたので、各地区で地域懇談会を開き、復旧に向けて分野別の目標を皆さんにお伝えすることができました。

——応急仮設住宅の建設はいかがでしたか？

仮設住宅の建設に当初4カ月かかる計画でしたが、北海道には迅速に3カ月で建設していただいたのです。少しでも落ち着いた避難生活を送れるよう全力で支援に取り

組みました。

もう一つ大きなことは福祉仮設住宅です。前例がなかったため、認めてもらうのに時間がかかりました。「今後も自然災害で福祉施設が被災することもあるはずだから、新たな制度をつくってください。我々はその試金石になります」と覚悟を示して、北海道に福祉仮設住宅を建てていただきました。

あらゆる機関には3町で意見を統一して要望させていただきましたので、受け止める各関係機関も対応しやすかったと思います。

——11月15日に当時の天皇（現上皇）皇后（現上皇后）両陛下がお見舞いに見えられました。どんな感想をお持ちですか？

非常に緊張しました。お越しになるという連絡をいただいた時には、本当に嬉しかったです。それまで、町民は徐々に落ち着きを取り戻している状況であったものの、どうしても目線が下を向いている。明るい話がしづらい状況だったことは間違いありません。11月15日に両陛下をお迎えし



被害状況や復旧事業などを説明した住民懇談会